徹選択本願念仏集　書下文

〈凡　例〉

（一）本訓読は、「敬道校訂本」（天保八年刊・佛教大学所蔵）を底本とした。

（二）漢字表記は、平易を旨とし可能なものは常用漢字に改めた。

（三）本訓読中、浄土三部経よりの引用は「仏のたまわく」とし、他の経論よりの引用は「仏いわく」とした。

徹選択本願念仏集　上

沙門　弁阿撰

『徹選択集』は弟子が昔の聞きに任せ、つぶさに以てその義を述し、聖教の誠説を尋ね、すなわち以てその文に符す。

選択本願念仏集

南無阿弥陀仏　往生之業念仏為先

釈して曰く、まず本『選択集』の題に就いて、これに三義有り。いわゆる、第一に、本『選択集』の題中に「念仏」と言うは、これ諸師所立の口称の念仏なり。故に題の次の行に「南無阿弥陀仏」と言うなり。第二に、本『選択集』の題の中に「本願」と言うは、これ善導所立の本願念仏なり。故に題の次の行に「南無阿弥陀仏」と言うなり。第三に、本『選択集』の題中に「選択」と言うは、これ然師所立の選択念仏なり。故に題の次の行に「南無阿弥陀仏」と言うなり。この故に、本『選択集』の題中に、三重念仏の義有りといえども、ともに観念の念仏に非ず。ただこれ口称の念仏なり。故に題の次、文の初めに「南無阿弥陀仏」と置くる

は、すなわちこれ結前生後なり。結前とは、いわゆる前の題中の三義、ともにこれ称名なることを結するなり。生後とは、いわゆるこの『集』に列する所の一一の章段もまた皆、称名の義を顕さんが為なり。また往生極楽の為には、この南無阿弥陀仏の口称念仏を以て、第一の行とす。この義を顕さんが為の故に、註に「往生之業念仏為先」と云うなり。また第一の念仏の義は、これ和漢両朝の往生伝に依ってこれを記し、第二の念仏の義は、これ善導和尚の『観経の疏』に依ってこれを記し、第三の念仏の義は、これ三部の阿弥陀経に依ってこれを記す。この三義は、またこれ行者の口中に唱える所の称名念仏なり。次に、本『選択集』に載する所の文義に就いて、その十六篇有り。一一の篇、今まさにこれを釈すべし。

第一篇に、「道綽禅師、聖道・浄土の二門を立てて、聖道を捨て、正しく浄土に帰す」とは、まず聖道門に就いて、その二つ有り。一には大乗の聖道、二には小乗の聖道なり。いわゆる教主釈尊、五濁悪世に出でて無上正覚を唱え、この穢土の衆生の為に大小乗の法門を説いて出離得道せしむ。これに依って、大乗の根機は大乗の法門を学して大乗の聖人と成り、小乗の根機は小乗の法門を学して小乗の聖人と成る。故に大小異なりといえども同じく聖道門と名づけるなり。次に浄土

門に就いて、また二有り。一には十方浄土門、二には西方極楽浄土門なり。十方浄土門とは、いわゆる『十方随願往生経』これなり。また『十住毘婆沙論』の易行品これなり。西方極楽浄土門とは、いわゆる『無量寿経』・『観経』・『阿弥陀経』これなり。また天親の『往生論』これなり。馬鳴菩薩の『大乗起信論』に云く、「また次に、衆生初めてこの法を学して正信を求めんと欲するに、その心怯弱なり。この娑婆世界に住するを以て自ら常に諸仏に値って、親承供養すること能わざらんことを畏れ、懼れて信心、成就すべきこと難しと謂って、意、退せんと欲する者は、まさに知るべし、如来に勝方便有って、信心を摂護す。謂く、専意念仏の因縁を以て、願に随って他方の仏土に生ずることを得て、常に仏を見たてまつり永く悪道を離る。修多羅に説くがごとき、もし人、専ら西方極楽世界の阿弥陀仏を念じ、所修の善根を回向して、彼の世界に生ぜんと願求すれば、すなわち往生を得て、常に仏を見たてまつるが故に、ついに退有ること無し。もし彼の仏の真如法身を観じて、常に勤めて修習すれば畢竟じて生ずることを得て正定に住するが故に」と。已上　また『十住毘婆沙論』の易行品に云く、「大乗を行ずる者、仏、かくのごとく説きたまう。仏道を求めんと発願すること、三千大千世界を挙ぐるよりも重し。汝、阿惟越致地は、この法はなはだ難し、久しくしてすなわち得べし、もし易行道の疾く阿惟越致地に至ること

を得ること有りやと言わば、これすなわち、怯弱下劣の言にして、これ大人志幹の説に非ず。汝、もし必ずこの方便を聞かんと欲せば、今まさにこれを説くべし。仏法に無量の門有り。世間の道に難有り、易有り。陸道の歩行はすなわち苦しく、水道の乗船はすなわち楽しきがごとし。菩薩の道もまたかくのごとし。あるいは勤行精進する有り、あるいは信の方便を以て、易行にして疾く阿惟越致地に至る者有り」。また云く、「この諸仏世尊、現に十方の清浄世界に在す。皆、称名し憶念すべし。阿弥陀仏の本願、かくのごとし。もし人、我れを念じ名を称し、自ら帰せば、すなわち必定に入って、阿耨多羅三藐三菩提を得べし」。已上　また『優婆提舎』に云く、「願受無量諸仏世界とは、諸〳〵の菩薩、諸仏世界の無量厳浄なるを見て種種の願を発す。仏世界有って、すべて衆苦無く、乃至三悪の名も無しとは、菩薩見已って自ら発願して言く、我れ作仏せん時、世界に衆苦無く、乃至三悪の名無きことも、またまさにかくのごとくなるべし。仏世界有って、七宝荘厳し、昼夜常に清浄の光明有って、日月有ること無し。すなわち発願して言く、我れ作仏せん時、世界に常に厳浄の光明有ることも、またまさにかくのごとくなるべし。仏世界有って、一切衆生、皆、十善を行じ、大智慧有って、衣服飲食、念に応じて至る。すなわち発願して言く、我れ作仏せん時、世界の中の衆生の衣服飲食も、またまさにかくのごとくなるべし。仏世界有

って、純ら諸菩薩にして仏の色身のごとく、三十二相光明徹照す。乃至声聞・辟支仏の名有ること無く、また女人無し。一切皆、深妙の仏道を行じ、十方に遊至して一切を教化す。すなわち発願して言く、我れ作仏せん時、世界の中の衆生もまたまさにかくのごとくなるべし。かくのごとき等の無量の仏世界種種厳浄なる、願じて皆これを得。ここを以ての故に願受無量諸仏世界と名づく」。また云く、「問うて曰く、何等がこれ仏土を浄むるや。答えて曰く、仏土とは、百億の日月・百億の須弥山・百億の四天王等の諸天、これを三千大千世界と名づく。かくのごとき等の無量無辺の三千大千世界を名づけて一仏土とす。仏この中において仏事を施作す。乃至　かくのごとき等の仏土荘厳を名づけて仏土を浄むとす。阿弥陀等の諸経の中に説くがごとし」と。已上　また天台大師の云く、「たとい人中に生ずることを得れども、聖道は得難し。乃至これを難行道と名づくなり。乃至　『十住毘婆沙論』に易行道と名づくなり」と。本『選択集』に云く、「およそこの『集』の中に聖道・浄土の二門を立てる意は、聖道を捨てて浄土門に入らしめんが為なり。これに就いて二の由有り。一には大聖を去ること遙遠なるに由る。二には理深く、解微なるに由る」。已上　計るにそれ、時は滅後に属し、代は末法に当る。戒定智慧、ようやく廃れ、道果を得ることはなはだ希なり。如来の滅後すでに二千余年、大聖を去ることはなはだ遙遠なり。理深く、解

微なるが故に億億の衆生の中にいまだ一人として得る者有らず。これに因って、曇鸞・道綽の二師、像法の終り末法の始めに出でて、忝くも釈尊の使者と為って、特り弥陀の教法を弘む。鈍根無智の我等、たとい聖道の根機に漏れて即身に断惑することを能わずといえども、すでに念仏の法雨を降らす、誰人か甘露の妙味に潤わざらん。然ればすなわち、先に聖道を学する人といえども、もしこの旨を知ること有らば、いずくんぞ聖道を棄てて、浄土に帰せざらんや。

第二篇に、「善導和尚、正雑二行を立て雑行を捨て正行に帰す」とは、『選択集』の意、且く聖道門を閣き、早く浄土門に入って浄土の行を修すべし。浄土の行に就いて、二有り。一には諸行往生、二には念仏往生なり。且く諸行を止めて偏に念仏を行ずれば、必ず生死を離れ、定んで往生を得。ただし念仏においてまた二種有り。一には観行の念仏、二には称名の念仏なり。今、善導の意は全く観行の念仏に非ず。ただこれ称名の念仏なり。釈尊の付属流通の故に、弥陀本願成就の故に決定往生疑い無し。弟子某甲、先師在世の時かくのごとくこれを習い伝う。仍って末代の行者の為に、つぶさに以て教え置く所なり。疑うこと勿れ。云云

第三篇に、「弥陀如来、余行を以て往生の本願と為したまわず、ただ念仏を以て往生の本願と為したまう」とは、『双巻経』の意、阿弥陀如来、因位の昔その名を法蔵比丘と号す。世自在王仏の出世に値遇して四十八の大願を発起したまう。然るにその中、往生の行において別して一の大願を立てたまえり。いわゆる第十八念仏往生の願これなり。云云

問う、上人の選択とはこれ何なる義ぞや。答う、善導和尚の意、念仏とは本願往生の念仏なり。弥陀四十八願の中には、第十八願これなり。この本願の義の上に、また法然上人、浄土三部の諸本を撿べ同本異訳の諸文を挍べて、今、法蔵菩薩選択の義を勘出したまうなり。委しくは『選択集』のごとし。これはすなわち末代往生の珍宝なり。下根出離の明鏡なり。誰かこれを翫ばざらんや。問う、聖教の中、弥陀の本願を以て選択と名づけること、その証拠有りや。答う、龍樹菩薩の言く、「ともに十方清浄世界を観じて自らその国を荘厳す。阿弥陀仏、先世の時、法蔵比丘と作る。仏、将導して遍く十方に至り清浄の国を示して、浄妙の国を選択して、以て自らその国を荘厳せしむるがごとし」と。已上

弟子某甲、然師入滅の後、自らこの文を撿べ得たり。上人の料簡、菩薩の聖教に符号す。いよいよ以て随喜の涙を流し、ますます以て渇仰の誠を致す。龍樹大士、すでに阿弥陀仏先世の時、法蔵比丘と作るとき浄妙の国を選択して、以て自らその国を荘厳せしむと云えり。

以て知んぬ、四十八願皆これ選択本願なりと云うことを。中に就いて第十八願は、これ選択本願念仏往生の願なり。然ればすなわち選択本願念仏の義は、更に以て法然上人の義に非ず。すなわちこれ龍樹菩薩の義なり。また龍樹菩薩の義に非ず。すなわちこれ法蔵菩薩の義なり。また法蔵菩薩の義に非ず。すなわちこれ先仏の義なり。先仏の義なるが故に、すなわちこれ法蔵菩薩の義なり。法蔵菩薩の義なるが故に、すなわちこれ龍樹菩薩の義なり。龍樹菩薩の義なるが故に、すなわちこれ法然上人の義なり。この義尤も甘心すべし、尤も甘心すべし。上人手自三部経を料簡して、我が朝に始めてこの義を立てたまう。唐土の人師所立の義の中にも、この選択の義全く以てこれ無し。云云　この書の起りは専らこの事に在り。学者、心を留めよ。また問うて曰く、上の問答の意、法蔵菩薩、四十八願を以て仏土を荘厳したまうの旨、その義分明なり。ただし念仏を以て別して選択と名づけること、何の証文有りや。答えて曰く、『菩薩念仏三昧経』に云く、「この念仏三昧は過去諸仏の讃嘆したまう所なり。乃至一切如来の印可したまう所なり。乃至一切諸仏の選択なり。乃至一切諸仏の財宝なり。乃至一切諸仏の舎利なり。乃至一切諸仏の体性なり」。已上経文。　これはすなわち念仏を以て別して選択と名づく、その証文なり。問う、この念仏三昧は過去諸仏の讃嘆したまう所とは、その義然るべからず。所以は何んとなれば、称名念仏はこ

れ仏方便の法なり。浅智愚鈍の為に設ける所の浅行なり。諸仏、何が故ぞ深を捨て浅を取ってこれを讃嘆したまうや。答う、念仏三昧は、すなわちこれ一切の菩薩浄仏国土の本願の中のその一願なり。然ればすなわち過去の諸仏因位の昔、菩薩の行を立て仏国土を荘厳したまうの時、発す所の悲願なるが故に諸仏これを讃嘆したまうか。問う、この念仏三昧は一切如来の印可したまう所とは、その義、然るべからず。所以は何んとなれば、称名念仏はこれ浅機の為に教える所の浅行なり。諸仏、何が故ぞ深行を捨て浅行を取ってこれを印可したまうや。答う、所詮は衆生出離の要法を以て深行と云うべきなり。然るに仏の本願力に依るが故に、衆生皆称名念仏して往生を得。あにこれに過ぎたる深行有らんや。これに依って諸仏これを印可したまうか。問う、この念仏三昧は一切諸仏の選択したまう所とは、その義、然るべからず。所以は何んとなれば、称名念仏はこれ浅行なり。諸仏、何が故ぞ深行を選択したまわずして浅行を選択したまうや。答う、称名念仏は、すなわちこれ易行易往の法門、下根下機の行業なり。また仏の本願なるが故に、決定往生疑い無きが故に諸仏これを選択したまうか。問う、この念仏三昧は一切諸仏の財宝とは、その義、然るべからず。所以は何んとなれば、諸仏はこれ実相の宝珠を以て財とす。何ぞ名字似名の法を以て財宝とすべけんや。答う、諸仏は万法を以て財とす。故に似名の名字、尤もこれ財宝

の一分なり。問う、この念仏三昧は一切諸仏の舎利とは、その義、然るべからず。所以は何んとなれば、舎利はこれ世尊の身骨なり。念仏はこれ如来の教法なり。然るに何ぞ念仏の法門を諸仏の舎利と言うや。答う、舎利に二有り。一には遺身の舎利、二には法身の舎利なり。遺身舎利とは、すなわちこれ身骨なり。法身舎利とは、すなわちこれ遺法なり。ともにこれ如来滅後利益衆生の能化なるが故に遺身・遺法と云うなり。いわんやまた仏と法とは、すなわちこれ一体不二の義なり。仏は、すなわちこれ法を覚するなり。法を覚する者は、すなわちこれ仏なるが故に、仏に即して、しかも法なり、法に即して、しかも仏なり。問う、この念仏三昧は一切諸仏の体性とは、その義、然るべからず。所以は何んとなれば、体とは名に対して体と云うなり。性とは相に対して性と云うなり。この故に、称名念仏を以て諸仏の名相と云うべし。何ぞ体性と云うや。答う、至極甚深の大乗は、名すなわちこれ体なり。相すなわちこれ性なり。この故に、名体不二・相性一如なり。然ればすなわち、この念仏三昧は一切諸仏の体性とは、これはこれ大乗至極の法門なり。問う、選択と言うはまたその例有りや。答う、その例有るなり。ただ念仏の一法を以て選択と名づけるのみに非ず。また菩薩の中に選択の菩薩と名づくる有り。いわゆる釈迦菩薩はこれ選択の菩薩なり。問う、何が故ぞ釈迦菩薩を以て選択の菩薩と名づけるや。答う、この娑婆の衆生は、

罪障深重、無善無福、心濁諂曲心不実の故に、十方の諸大菩薩、この世界を捨てて更に化度したまわず。然るに釈迦菩薩、慈悲広大にしてこの界に出でて罪業の衆生の為に大誓願を発して能化の仏と作りたまう。故に選択の菩薩と云うなり。已上、『経』に出づ。問う、法蔵菩薩選択の願は、真位・似位の中には何の位においてこの願を発したまうや。答う、知り難し。云云　両方にこれを尋ねん。もし似位の中においてこの願を発さば、法蔵菩薩、二百一十億の諸仏国土の荘厳を選択して、五劫の間、思惟照察す。定んで知んぬ、地上、真位の発願なるべし。もし真位の中においてこの願を発さば、法蔵菩薩、国を棄て王を捐て始めて無上道心を発してこの願を立つ。以て知んぬ、地前、凡位の発願なるべし。もし爾らば、両条ともに思い難し、如何。答う、上人の云く、この事、真実に知り難し。ただし経文に「高才勇哲与世超異」と云えり。もしこの文の意に依らば、真位の発願なるべきか。云云　そもそも弟子某甲、この『徹選択集』を造って、上人の『選択集』に添えるの意は、深く以てその選択の義を述し徹せんが為なり。これに依って、彼の義底を顕さんが為に、今この問答を致す。それ念仏往生を知らんと欲せば、まずすべからく一切菩薩の浄仏国土成就衆生の義を知るべし。また一切菩薩の本願を習うべし。予、昔、先賢高才の人に値い奉って、これを習いこれを伝う。然るに菩薩の位に二有り。一には、三界内に住する生身の菩薩、

二には、三界外に出でる法性身の菩薩なり。生身の菩薩は、いまだ浄仏国土成就衆生の行に能えず。法性身の菩薩は、すでに浄仏国土成就衆生の行に能う。これに因って龍樹・天親、同じくこの旨を宣べ、曇鸞・天台、ならびにこの義を存す。云云

沙門某甲、昔、聖道門を学せし時、聊か彼の浄仏国土成就衆生の義を習い伝え、今、浄土門に入る後、またこの選択本願念仏往生の義を相承す。二師の相伝を以て、聖教の諸文を見るに、その義、更に以て教文に違わず。単聖道門の人、単浄土門の人はこれを知るべからず。聖道浄土兼学の人、これを知るべし。この意を得てより、一切の大乗経を披き、一切の大乗論を見るに、随喜の涙禁じ難し。これすなわち聖教の源底なり。法門の奥蔵なり。仏菩薩の秘術なり。この書の上に載せ尽くすべからず。委しくは口伝を聞くべし。

第四篇に、「三輩念仏往生」とは、『双巻経』の意、上巻には弥陀因位の本願を明す。いわゆる四十八願これなり。下巻には衆生往生の行業を明す。いわゆる三輩の修行これなり。その三輩とは、上中下輩なり。この上中下輩の中において、専雑二行を明す。而るに雑行においては「一向」の言を置かず、念仏の行においては、皆「一向」の言を置く。これすなわち、弥陀本願の故なり。師の云く、『観経』の九品と

『寿経』の三輩と、これはこれ開合の異なり。然るに『寿経』の三輩の下に念仏を明す。故に知んぬ、『観経』の九品の中にも、皆、念仏有るべし。ただしこの『経』は存略なり。云云

第五篇に、「念仏利益」とは、自余の修行に、皆、得益有り。これに例してこれを思うに、念仏の行においてもまた利益有るべし。故にその利益を明すなり。

第六篇に、「末法万年の後、余経はことごとく滅し、特り念仏を留める」とは、教主釈尊、末法の衆生の為に慈悲を遺し留める時、念仏はすなわちこれ、時機相応の法なるが故に、往生の機の為に特り念仏を留めたまうなり。問う、正像末の時節、如何。答う、正法五百年、像法一千年、末法一万年と。云云　問う、『大集経』の中には、正法千年と云えり。何ぞ今、五百年と云うや。答う、人師毎に正法五百年と云えり。所以は何んとなれば、仏、女人の為に出家を許したまう、この故に、今、五百年に促まるなり。その旨、入涅槃の遺教に分明なり。また『釈迦譜』等の文のごとし。

第七篇に、「弥陀の光明、余行の者を照らさず、ただ念仏の行者を摂取したまう」

とは、問う、仏は平等の慈悲なり、何ぞ余行の者を照らさずして、ただ念仏の行者を摂取したまうや。答う、善導の釈に云く、「まさに知るべし、本願最も強しと為す」と。已上　所以は、余行は非本願なり。故にこれを照らさず。念仏はこれ本願なるが故に、これを照らしたまうなり。

第八篇に、「念仏の行者、必ず三心を具足すべし」とは、問う、善導の『疏』のごときは、三心は、至誠心・深心・回向発願心等と悉しく以てこれを釈す、もし爾らば、有智の人はこれを知るべし、無智の倫はこれを知らず、もし知らずんば、三心を具すべからず、三心を具せずんば往生を得べからず、如何。答う、師の云く、「善導和尚の意は、決定往生の信心を発して一向専修の念仏を行じ、偏に臨終正念を期して退転懈怠無き者は、自然に三心を具するなり」。経文釈文の意、この趣を出でず。然ればすなわち、善導所立の一向専修は広大慈悲の支度を構え、正義正理の方便を設け、末代愚鈍の衆生に与えたまえる決定往生の要法なり。これに依って、懐感禅師、『群疑論』に釈して云く、「善導禅師、諸〳〵の衆生に勧む、専ら西方浄土の業を修する者は、四修墜ちること靡く、三業雑ること無く、余の一切の諸願諸行を廃して、西方の一行を唯願唯行すべし。雑修の者は万に一りも生ぜず、専修の人は千に一りも

失すること無し」と。已上　感師の相伝、すでに以てかくのごとし。末代の念仏者、あえて忽緒せしむること勿れ。

第九篇に、「念仏の行者、四修の法を行用すべし」とは、師の云く、念仏の行者、往生の願を発して、あるいは三万返を修し、あるいは五万六万等を修し、臨終に至るまで退転無からしむる者は、これすなわち四修の念仏なり。この意を以て、能く能く思い合わすべきなり。

第十篇に、「弥陀の化仏、来迎して聞経の善を讃嘆したまわず、ただ念仏の行を讃嘆したまう」とは、いわゆる念仏の行者、機、熟し、時、至ってその行成就する時、弥陀の化仏来って念仏を讃嘆したまう。これすなわち我が本願の故なり。十二部経を讃じたまわざることは、これすなわちその本願に非ざるが故なり。

第十一篇に、「雑善に約対して念仏を讃嘆したまう」とは、我等、無始より生死に輪回す、今度、念仏に遇って往生を得べし。これはこれ上上人なり。最勝人なり。好人なり。妙好人なり。また観音・勢至の二尊、朋友知識と為って影護を垂れ、増上

の勝縁と為って行者を離れず。この現益を思うに、念仏の行者、尤も殊勝なり。

第十二篇に、「釈尊、定散の行を付属したまわず、ただ念仏を以て阿難に付属したまう」とは、師の云く、これはこれ至極最要の文なり。念仏の行者、尤も肝に染むべきのみ。『観経』の意、「汝好持是語」等とは、阿難はこれ、釈尊弟子の中において憶持不忘の徳有り。仏の言わく、汝はこれ、憶持不忘の人なり、好くこの『観経』を聞持して、我が滅度の後において弘通すべしと。然るにこの『観経』は、仏の随自意に約せば、ただこれ南無阿弥陀仏なり。この故に仏名を以て、阿難に付属したまう。これに依って、善導の云く、「仏の本願に望むれば、意、衆生一向に専ら弥陀仏の名を称するに在り」と。已上　知んぬ、智人は智人を知る。この故に、釈迦の智人有って、弥陀の智人は、その名号を以て往生の本願とすと知りたまうが故に、しかも阿難に対してこの『経』を流通したまう時、弥陀の名号を付属したまうなり。近代、有人の云く、「それ菩提心は、大乗の慈父、菩薩の悲母なり。仏海の源底、法門の奥蔵なり。菩提心を発さずんば、菩薩の功徳、成就すべからず。菩提心を発さずんば、如来の正覚、満足すべからず。然るに今、『選択集』の意は、ただ念仏の一行を以て、その往生の浄業と為して、菩提の秘術を具足せしめず。すでに大乗の教理に違し、ま

た菩薩の巧度に背けり。もし爾らば、大乗の教なりといえども、菩薩の行を去らん。何ぞ往生極楽を遂げんや」と。云云　この難、尤も愚かなり。所以は何んとなれば、菩提心には二有り。一には凡位の菩提心、二には聖位の菩提心なり。凡位の菩提心に就いて、また二有り。一には薄地の凡夫の菩提心、二には六度の菩薩の菩提心なり。薄地の凡夫の菩提心とは、一華、一香、一称、一礼の功徳を以て仏道を成ぜんと願ずるなり。六度の菩薩の菩提心とは、万行、諸波羅蜜、一切の善根を修して仏道を成ぜんと願ずるなり。また菩提心に二有り。一には菩提心願、二には菩提心行なり。菩提心願とは、いわゆる四弘誓願これなり。菩提心行とは、いわゆる六度万行これなり。今、この宗の意は薄地の凡夫、底下の我等は断惑修理の観行に能えず、入聖得果に堪えざるの根機なり。この故に念仏の一行を修して、まず近く浄土に生ぜんと願じ、次に遠く仏果に帰せんと願ず。これはこれ菩提心願なり。また四弘誓願の中に、「法門無尽誓願知」とは、法門万差なれば無智下根の輩はこれを知ること能わず。この故に念仏の一門を行じて浄土に往生して後、無尽の法門を修習して仏道を成ぜんと願ずるも、またこれ菩提心願なり。また善導の意、南無とは作願回向なり。この回向に約せば、また近遠有り。近回向とは往生極楽なり。遠回向とは阿耨菩提なり。これはこれ菩提心願なり。また不惜身命の行は、凡夫の堪ゆる所に非ず。易行易往の法、

尤も我等が分に当れり。すべからく念仏往生の後、三解脱を証し、六神通を得、この穢国に還来して苦の衆生を救摂すべしと要するも、またこれ菩提心願なり。然ればすなわち、今時、具縛の凡夫は、煩悩の境は強く、忍力の根は弱し。たとい菩提心願を発すといえども、更に菩提心行に能えず。故にこれを廃するなり。全く以て難に非ざるか。これに依って『大智度論』に云く、「新発意の菩薩は、譬えば鳥子の双翼いまだ成ぜざれば、せめて高く翔しむべからず、羽翮成就して、すなわち能く遠く飛ぶがごとし」と。また『論』に云く、「譬えば鳥の翅無くして高く翔ること能わざるがごとく、菩薩、神通無くんば意に随って衆生を教化すること能わず」と。已上　天台大師の云く、「また鳥子の翅羽いまだ成ぜざれば、ただ樹に依り枝を伝うことを得て遠く去ること能わず、羽翮成就してまさに能く空に飛ぶこと自在無礙なるがごとく、凡夫は力無ければ、ただすべからく専ら阿弥陀仏を念ずべし」と。已上　大智律師の云く、「また弱羽のただ枝を伝うべきがごとく、これよりことごとく平生の所学を棄て専ら浄土の教門を尋ぬ」と。已上　天竺の菩薩ならびに唐土の人師、同じくこの旨を存す。尤も信順すべし。あえて疑謗すること勿れ。

第十三篇に、「念仏を以て多善根とし、雑善を以て少善根とす」とは、いわゆる往

生の功徳善根を以て福と名づくるなり。この福において二種有り。一には多善根福徳因縁、二には小善根福徳因縁なり。多善根福徳因縁とは念仏なり。小善根福徳因縁とは雑行なり。唐土中古の学者王日休先生、この義を存す。これに依り自ら称名の行を修し、立ちながら往生を遂げ畢んぬ。また元照律師も同じくこの義を存す。云云

第十四篇に、「六方恒沙の諸仏、余行を証誠したまわず、ただ念仏を証誠したまう」とは、問う、『大乗荘厳功徳経』のごときは、諸仏の証誠を明すに念仏、余善ともにこれを証誠す、如何。答う、その二義有り。一には念仏、余行ともにこれを証誠したまうか。ただし『選択集』に至っては『観経』・『寿経』二部の中、諸行を説く時は証誠を見ず、『阿弥陀経』に至って念仏を説く時、始めて証誠有り。故に世間流布の経に約し余行において証誠無しと言うか。二には、ただ念仏に約してこれを証誠したまうか。ただし『大乗荘厳経』に至って、彼の『経』の中に念仏、余行ともにこれを明すといえども、実には念仏に約してこれを証誠したまうか。

第十五篇に、「六方の諸仏、念仏の行者を護念したまう」とは、『阿弥陀経』のごとき、祇園精舎の衆会、現座聴聞の時、六方の諸仏、舌相を出だし証誠を為したま

う。また如来滅後の時の念仏行者の為に、諸仏、護念を加えたまう。これすなわち一仏一切仏の故。釈迦一仏、在世、滅後の一切衆生の為に念仏の法門を説きたまえば、六方の諸仏、同じく随喜してこれを護念したまう。この勝益、尤も憑むべし。何ぞ意を励まさざらんや。

第十六篇に、「釈迦如来、弥陀の名号を以て慇懃に舎利弗等に付属したまう」とは、いわゆる五濁増の時の衆生の心は、はなはだ以て荒乱不調なり。罪業を造る事、尤もこれ多し。然るにこの五濁増の中において念仏往生の機有り。釈尊、仏眼を以てこれを照らして、念仏を以て舎利弗等に付属し、我が滅後においてこれを弘通すべしと付属を与えたまえるなり。

已上、本『選択集』に載する所の十六篇、一一にこれを釈し畢んぬ。

問う、上人『選択集』の中に幾くの選択の義有りや。答う、上人所造の『選択集』に八種の選択有り。その八種の選択とは、『双巻経』の中に三の選択有り。一には選択本願、二には選択讃嘆、三には選択留教なり。『観経』の中にまた三の選択有り。一には選択摂取、二には選択化讃、三には選択付属なり。次に『阿弥陀経』

の中に一の選択有り。いわゆる選択証誠なり。『般舟三昧経』の中にまた一の選択有り。いわゆる選択我名なり。已上、総じて八種の選択なり。委しくは『選択集』のごとし。

今、この外にまた二十二種の選択の義を加う。一には『双巻経』に就いてまた一種の選択有り。いわゆる、三輩往生の下に諸行を選捨して「一向」の言を置かず。念仏を選取して「一向」の言を置く。これすなわち、選択一向の義なり。二には『観経』に就いてまた一種の選択有り。いわゆる、下品三生は十悪の罪人、破戒の罪人、五逆の罪人なり。これ等の罪人、罪障重きを以ての故に、諸仏の浄土において更に選捨せらるるなり。仏の本願を以ての故に、弥陀の浄土においてこれを選取したまうなり。これを以てこれを案ずるに、余善はこれ能治の法に非ず。念仏はこれ能治の法たり。まさに知るべし、下品三生は選択悪業待対の義なり。三には『阿弥陀経』に就いてまた一種の選択有り。いわゆる、小善根福徳の因縁を選捨して、大善根福徳の因縁を選取す。これすなわち、選択大善の義なり。四には『文殊般若経』の中に就いてまた一種の選択有り。いわゆる、相貌を選捨して名号を選取す。これすなわち、選択一行の義なり。五には普賢菩薩に就いて一種の選択有り。いわゆる、『華厳経』に云く、「普賢菩薩、臨終の時、十方浄土を選捨して極楽浄土を選取す」。これすなわち、普賢菩薩選択臨終の義なり。六には文殊菩薩に就いて一の選択有り。いわゆる、

『文殊発願経』に云く、「文殊菩薩、臨終の時、十方浄土を選捨して極楽浄土を選取す」。これすなわち、文殊菩薩選択臨終の義なり。七には観音菩薩に就いて一の選択有り。いわゆる、『千手経』に云く、「我が本師阿弥陀仏を念ずべし」と。まさに知るべし、余仏を選捨して本師を選取す。これすなわち、観音菩薩選択本師の義なり。八には勢至菩薩に就いて一の選択有り。いわゆる、『大仏頂経』に云く、「勢至菩薩の本願、諸行を選捨し念仏を選取して無生忍を得て極楽に往生す」。これすなわち、勢至菩薩選択因行の義なり。九には龍樹菩薩の『十住毘婆沙論』に就いて一の選択有り。いわゆる、難行道を選捨して易行道を選取す。これすなわち、選択易行道の義なり。また龍樹菩薩所造の『論』に就いてまた一の選択有り。いわゆる、阿弥陀仏、先世の時、法蔵比丘と作って粗悪を選捨し善妙を選取して以て本願とす。これすなわち、龍樹菩薩選択本願の義なり。十には天親菩薩の『往生論』に就いて一の選択有り。いわゆる、五念門の中において、第二の讃嘆門はこれ弥陀の名義なり、非本願の諸行においては選捨してこれを讃嘆せず、本願とするの名義においては選取してこれを讃嘆す。これすなわち、選択名義讃嘆の義なり。十一には匡廬山の慧遠大師に就いて一の選択有り。いわゆる、慧遠大師、若干、三蔵の教法を習学すといえども、その中において諸行を選捨し、念仏を選取して、我が得度の要法とす。

これすなわち、選択得度念仏の義なり。十二には曇鸞法師に就いて一の選択有り。いわゆる、菩提流支三蔵、曇鸞法師に対する時、長生不死の法と号して『観経』を与え畢んぬ。法師、この『経』を学得して諸行を選捨し、念仏を選取して往生の望を遂ぐ。これすなわち、選択長生念仏の義なり。加之、曇鸞法師の義に就いて三の選択の義有り。いわゆる、一には諸行においては在心の義無し。故にこれを選捨し、念仏においては在心の義有り、故にこれを選取す。これすなわち、選択在心の義なり。二には諸行においては在縁の義無し。故にこれを選捨し、念仏においては在縁の義有り、故にこれを選取す。これすなわち、選択在縁の義なり。三には諸行においては在決定の義無し。故にこれを選捨し、念仏においては在決定の義有り、故にこれを選取す。これすなわち、選択在決定の義なり。十三には天台大師に就いて一の選択有り。いわゆる、天台の別伝に云く、「念仏はこれ火車の相、現ずるとき能く改悔する法なり」と。余行はこれ火車の相、現ずるとき能く改悔する法に非ず。ここを以て、不能改悔の法を選捨し、能改悔の法を選取して、『十疑論』を造って専ら念仏を弘めるなり。これすなわち、天台大師選択改悔念仏の義なり。十四には道綽禅師に就いて一の選択有り。いわゆる、并州において男女の群類を聚めて得道の要法を弘むる時、万法を選捨し、念仏を選取してこれを弘通したまう。これすなわち、道綽禅師選

択念仏の義なり。十五には善導和尚に就いて一の選択有り。いわゆる、末法の衆生の為に往生の要法を弘むる時、非本願の雑行を選捨し、本願たる念仏を選取す。これすなわち、善導和尚選択本願念仏の義なり。十六には懐感禅師に就いて一の選択有り。いわゆる、この感師は善導同時の人なり。いまだ対面せざるの間は、法相の法門を帯びて善導の念仏を破すといえども、すでに対面の時、善導の口より光明の出づるを見、化仏の現じたまうを拝し、たちまち善導に帰して諸行を選捨し、正しく念仏を選取す。これすなわち、懐感禅師の選択見仏念仏の義なり。十七には少康法師に就いて一の選択有り。いわゆる、烏龍山において三級の壇を築き四部の衆を集め念仏行道せしめ、諸行を選捨し念仏を選取してこれを興隆す。これすなわち、少康法師選択興隆念仏の義なり。十八には法照禅師に就いて一の選択有り。いわゆる、大聖竹林寺の記に云く、「法照禅師、五台山大聖竹林寺に参詣して普賢・文殊の二菩薩に値い奉り、末法の衆生の為に得度の要法を問いたまうに、普賢・文殊ならびに法照禅師の問いに答えて、諸行を選捨し、念仏を選取して末法得度の要法なりと教えたまえり」。これすなわち、法照禅師選択末法念仏の義なり。十九には慧日三蔵に就いて一の選択有り。いわゆる、慧日三蔵、天竺に入る時、印度の諸衆、偏に念仏を興す。これに依って帰朝の後、諸行を選捨して念仏を選取す。これすなわち、慧日三

蔵選択念仏の義なり。二十には大智律師に就いて一の選択有り。いわゆる、この律師はこれ本、すなわち四分律の学匠なり。然るに、四分の戒律を置き天台上乗の法に入ってこれを学する間に、身、重病を受け、病中に発願す。もし今度、病差えて存命せば浄土門に入って念仏を修すべしと。云云　願のごとく、病差ゆる後、上乗と戒との二法を選捨して念仏の一行を修す。これすなわち、大智律師の選択病中念仏の義なり。二十一には慧心先徳に就いて一の選択有り。いわゆる、慧心の『要集』に云く、「諸行は利智精進の人の為なり、予がごとき頑魯の者は念仏の一門に依るべし」。経論の要文を集めて、而して諸行を選捨し、正しく念仏を選取す。これすなわち、慧心先徳選択念仏往生の義なり。二十二には法然上人に就いて一の選択有り。いわゆる、善導和尚の本願念仏の義を以てその根本と為し、しかも経論を見てその本願の義の上にまた選択の義を加えたまえり。これすなわち、法然上人選択本願念仏の義なり。已上、二十二種の選択の義、畢んぬ。

問うて曰く、本『選択集』の中に称名念仏往生を明すこと、その義すでに足りぬ。今また重ねて『徹選択集』を造ること、何の要用有りや。答えて曰く、この書を造るに二意有り。いわゆる、一には先師上人の広学博覧の智徳を顕さんが為なり。二には濁世末代の小智愚鈍の迷惑を救わんが為なり。一に上人の広学博覧を顕さんが

為とは、小僧某甲、上人の御手よりいまだこの選択を伝えざる以前に、上人、予に向かってつぶさに以て告げて言く、世人、皆、因縁有って道心を発すなり。いわゆる父母兄弟に別れ、妻子朋友に離る等なり。然るに源空は指せる因縁も無く、法爾法然に道心を発す。故に師匠、名を授けて法然と号す。出離の志、至って深きの間、諸〻の教法を信じ諸〻の行業を修す。およそ仏教多しといえども所詮は戒定慧の三学に過ぎず。いわゆる、小乗の戒定慧、大乗の戒定慧、顕教の戒定慧、密教の戒定慧なり。然るに我がこの身は、戒行においては一戒をも持たず、禅定においては一もこれを得ず、智慧においては断惑証果の正智を得ず。然るに戒行の人師、釈して云く、「尸羅清浄ならずんば三昧現前せず」と。云云　また凡夫の心は物に随って移り易きこと譬えば猿猴のごとし、実に以て散乱動じ易く一心静まり難し。無漏の正智、何に因ってか発すことを得ん。もしそれ無漏の智剣無くんば、如何がまさに悪業煩悩の縄を断ぜんや。悪業煩悩の縄を断ぜずんば、何ぞ生死繋縛の身を解脱することを得んや。悲しいかな、悲しいかな、何がせん、何がせん。ここに予がごとき者はすでに戒定慧三学の器に非ず。この三学の外に我が心に相応する法門有りや、この身に堪能なる修行有りやと、万人の智者に求め、一切の学者を訪えども、これを教ゆる人無く、これを示す倫無し。然る間、歎き歎きて経蔵に入り、悲しみ悲しみて聖教に向か

い、手自これを披いてこれを見るに、善導和尚の『観経の疏』に「一心専念弥陀名号行住坐臥不問時節久近念念不捨者是名正定之業順彼仏願故」と云える文を見得るの後、我等ごとき無智の身は偏にこの文を仰ぎ専らこの理を憑み、念念不捨の称名を修して決定往生の業因に備うれば、ただ善導の遺教を信ずるのみに非ず、また厚く弥陀の弘願に順ず。順彼仏願故の文、神に染み心に留むのみ。その後、また慧心先徳の『往生要集』の文を披くに、「往生の業には念仏を本とす」と云えり。また慧心の『妙行業記』の文を見るに、「往生の業には念仏を先とす」と云えり。覚超僧都、慧心僧都に問いて云く、「汝が行ずる所の念仏は、これ事を行ずとやせん。これ理を行ずとやせん、如何」と。慧心僧都、答えて云く、「心、万境に遮えらる、ここを以て我れは、ただ称名を行ずなり。往生の業には、称名、尤も足りぬ。これに依って一生の念仏、その員数を勘うるに二十俱胝返なり」云云　然ればすなわち、源空も大唐の善導和尚の教えに随い、本朝慧心先徳の勧めに任せて称名念仏の勤め、長日六万返なり。死期ようやく近づくに依って、また一万返を加えて長日七万返の行者なりと。かくのごとく、慥かに以て厳訓を蒙り畢んぬ。上人の解行賢徳、けだし以てかくのごとし、弟子某甲、忝くも法然上人の在世に遇い奉り、親しく称名念仏の義理を習い伝え、専ら称名を修し偏に往生を期するの間、上人また告げて言く、「我

が所造の書有り。いわゆる、『選択本願念仏集』これなり。この書を以て、秘かに汝に伝えんと欲す。この書の造意は、九条の殿下、源空に向かい高命を示して云く、対面のついで毎に念仏往生の義、度度これを聞くといえども、即施即廃なり。請う、その文を註して予に賜われと。云云　源空、この仰せを蒙り辞し申すこと能わず。これに因って善導の釈義を謹んで以てその文勢を記し、兼ねてまたその義勢を陳ぶ」。然ればすなわち、『選択』の後序に云く、「而今、図らざるに仰せを蒙る。辞謝するに地無し。仍って今、懇に念仏の要文を集め、剰え念仏の要義を述ぶ。ただ命旨を顧みて不敏を顧みず、これすなわち、無慙無愧のはなはだしきなり。庶幾わくは一たび高覧を経るの後、壁底に埋ずめて窓前に遺すこと莫れ。恐らくは破法の人をして悪道に堕せしめん」。已上　すでにこの『集』を造り畢って以て殿下に進ず。殿下、上人に告げて言く、「今、この書は浄土宗の奥義なり。上人在世の時、禅室草庵より披露せしむること勿れ。大師入滅の後、博陸槐門よりこれを弘通すべし。源空、この炳誡を蒙るといえども、露命定め難く、今日死せんも知れず、明日死せんも知れず。故にこの書を以て密かに汝に付属す。外聞に及ぶこと勿れ」と。云云　ここに、弟子某甲、低頭挙手し合掌恭敬して跪いて以てこれを賜わり畢んぬ。歓喜身に余り、随喜心に留まる。伏して以れば報じ難く、仰いで以れば謝し難し。ただ義理を口決に伝うるのみ

に非ず、また造書を眼前に授けらる。解行、本ずくこと有り、文義すでに足れり。それより以降、往生の願いよいよ深く、念仏の行ますます高し。然して窮老の微質、図らざるに存命し、念仏の暇に当り行法の隙を瞻て、一切経蔵を披き優婆提舎を覧るに選択の正文、経教の説に相応し、念仏の妙義、論家の釈に違うこと無し。計り知りぬ、上人博覧の智、得て称すべからざる者なり。

二には濁世末代の小智愚鈍を救わんが為とは、末法の習い、昨日も今日も僅かに戒定慧三学の名有りといえども戒定慧の行人無し。乗急の智者無し。ただこれ有名無実なり。たとい至極上乗の法門を翫えども、更に断惑証理の智慧に非ず。これはこれ問答料簡の智慧なり。この智慧を以ては生死を出で難きか。然ればすなわち、釈尊出世の本意に任せ、弥陀超世の悲願を仰ぎ、聖道の難行を捨て浄土の易行を取り、専ら名号を称えて往生を願ずべきなり。これに依って善導釈して云く、「一万より十万に至る」と。また云く、「三万、六万、十万は、皆、これ上品上生人」と。これ等の文に就いて、上人在世の時のごとく若干の称名を励むべきなり。然るに近代、念仏の義者の中に先師の一門と号しながら、この『選択集』を抛って、今案の私義を立てるの間、異義蘭菊にして邪徒紛紛たり。ある人の云く、「もしその義を解せずして称名を行ぜば、譬えば牛の吼えるがごとく、また犬の鳴くに似たり。ただこ

れ畜生の念仏なり。この故に念仏者は、まさに文を学んで義を解すべし」と。云云　これに依って、彼れ、学文を得たる人と号して諸国に乱入して数返を止して称名を失する事、浅猿し浅猿し、無慚なり無慚なり。これすなわち、第六天の魔民なり。弥陀仏の怨敵なり。故に法然上人の言く、「我れはこれ無智の身なり。我れはこれ破戒の身なり。然りといえども弥陀本願口称念仏の力に依って決定往生を遂ぐべし」と。云云　これを聞き伝うる人、各各に勇みを成し、面面に悦を致し、百人は百人ながら口称を勤め、千人は千人ながら数返を行ず。たとい螢火一分の智有りといえども、すべからく痴闇無才の身と思い成すべし。何ぞ下愚の卑しき身を以て上智と誇って慢心せんや。拙きかな、拙きかな、末代の愚人、浄土の法門に暗くして念仏の義道に迷い、祖師の珠玉を捨て己身の瓦礫を握ること。痛ましいかな、痛ましいかな。当世の学者、選択の真文正義を抛ち、自己の回文曲義を挾み、世間を誑惑し行者を迷乱すること。罪業の至り、何事かこれに如かんや。恐るべし、恐るべし。悲しむべし、悲しむべし。早く仏道の正路に趣き、迷惑の邪執を改して、謗師謗法の罪業を懺悔し、椎撲地獄の苦患を免るべし。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、返す返す、先師上人の『選択集』を以て指南とし、また依憑に仰ぎ無間に精進して、懈怠無く疎略無く口称の念仏を行じて慥かに以て極楽に往生すべし。これはすなわち、末法の迷者を哀れむなり。

時に嘉禎三年の歳、丁酉に次る六月十九日、安居念仏中、先師報恩の為、末法哀愍の為、これを記す。

徹選択本願念仏集　上　終

徹選択本願念仏集　下

沙門　弁阿撰

問うて曰く、念仏三昧とは何の義ぞや。

答えて曰く、念仏三昧とはこれ不離仏の義なり。

問うて曰く、不離仏とは何の義ぞや。

答えて曰く、不離仏とは値遇仏の義なり。

問うて曰く、値遇仏とは何の義ぞや。

答えて曰く、値遇仏とは因地下位の菩薩は、必ず果地上位の如来に値遇して刹那片時も仏を遠離すべからざること、譬えば嬰児の母を離れざるがごとし。

問うて曰く、菩薩、仏を離れざることは何の要有りや。

答えて曰く、下位の菩薩は、必ず上聖の加護を被むるが故なり。

問うて曰く、菩薩、必ず仏に値遇することは、真位・似位の中には何れの位の菩薩ぞや。

答えて曰く、真位・似位ともにこれ因地下位なるが故に必ず仏に値遇するなり。

問うて曰く、似位の菩薩はいまだ無明を断ぜず、いまだ法性を顕さず。この故に無明を断じ法性を顕さんが為に必ず仏に値遇す。尤もその理有り。ただし真位の菩薩においては、すでに無明を断じ法性を証す。何ぞ必ず仏に値遇するや。

答えて曰く、真位の菩薩も必ず仏に値遇することは、これ一仏国より一仏国に至り仏国土を浄め衆生を成就せんが為なり。

問うて曰く、似位の菩薩に就いて、一仏国より一仏国に至って仏国土を浄め衆生を成就する行有るべきや。

答えて曰く、似位の菩薩は、浄仏国土成就衆生の願有りといえども、いまだ浄仏国土成就衆生の行有らず。

問うて曰く、似位の菩薩は、何が故ぞ願のみ有って行無きや。

答えて曰く、似位の菩薩は、いまだ無明を断ぜず、いまだ法性を顕さず。故に願のみ有って行無し。

問うて曰く、この似位の菩薩は浄穢二土の中には、何れの処に在りや。

答えて曰く、通じて浄穢二土に在り。

問うて曰く、浄土の菩薩は、これ似位といえども真位の徳を具す。これすなわち彼

の土、然らしめるなり。もし爾らば、浄土の地前の菩薩に何ぞ浄仏国土成就衆生の行無きや。

答えて曰く、浄土地前の菩薩は彼の土の法儀として、五通を具足し、十方の仏土において明らかにこれを縁ずといえども、ただ当分においてこれを縁ずるなり。彼の真位の菩薩の不動不散無方自在の所縁の、十方如恒沙の土において一仏国より一仏国に至って衆生を成就するに如かざるなり。

問うて曰く、穢土似位の菩薩も五通を具足す、何ぞ仏世に来って転法輪を請せざるや。

答えて曰く、穢土の似位の菩薩も五通を具足するが故に仏所には来るべし。ただし、いまだ他方の仏土に至らざるが故に一仏国より一仏国に至る徳を具足せず。

問うて曰く、地前似位の菩薩は、穢土の中において何れの処に在るや。

答えて曰く、あるいは色界長寿天に居し、あるいは忉利天の頂浮摩樹林に居す。

云云

問うて曰く、地前似位の菩薩、何ぞ長寿天に生ずるや。

答えて曰く、地前似位の菩薩、六度の行因を修すといえども、いまだ無漏の真理を顕さず。この故に浄土に至らずして穢土に留まる。穢土の中には勝処たるが故に彼

等の天に生ずるなり。

問うて曰く、地前似位の菩薩は、何の力に依るが故に自在如意に彼等の天に生ずるや。

答えて曰く、この菩薩は、つぶさに六度を行じ積功累徳の故に、方便願力を以て彼等の天に居して後仏の出世を待つなり。

問うて曰く、穢土の諸天に居する菩薩は五通を具すべきや。

答えて曰く、天上に居する菩薩は必ず五通を具するなり。いわゆる、諸波羅密を修行し方便力を以て仮りに暫く諸天に居して果報所得の五通を具するなり。

問うて曰く、地前似位の菩薩は、何ぞただ五通を具して六通を具せざるや。

答えて曰く、『論』に云く、「菩薩に二種有り。一には生身の菩薩、二には法身の菩薩なり。一には結使を断じ、二には結使を断ぜず。法身の菩薩は結使を断じて六神通を得。生身の菩薩は結使を断ぜず、あるいは離欲して五神通を得るなり。六神通を得る者は三界に生ぜず、諸仏の世界に遊んで十方の諸仏を供養す。遊戯神通の者は十方世界に到って衆生を度す」と。已上　文の意、知るべし。

問うて曰く、小乗の聖人、なお六通を具す。大乗の菩薩はたとい地前といえども、何ぞ六通を具せざるや。

答えて曰く、小乗の聖人の六神通を得るは、見思の惑を断じて漏尽通を具するなり。大乗は、地前の菩薩にはその二種有り。一には見思を断ずる菩薩、二にはいまだ見思を断ぜざる菩薩なり。今は未断見思の菩薩に約して、これを言うなり。たといまた已断見思の菩薩は、二乗の人に同じく一分漏尽の名有りといえども、これ真位の定散自在任運の漏尽通には非ざるなり。

問うて曰く、今の答えのごときは、漏尽通において二種有らば、もし爾らばその二種の差別、如何。

答えて曰く、地前の菩薩に一分の漏尽通有る者は、見思の惑を断じて一分の無漏有りといえども、ただこれ作意の漏尽通なり。真位の菩薩の漏尽通は任運自在の漏尽通なり。いわゆる、無明の惑を断じ法性の理を顕し、自然に薩波若海に流入す任運無窮の遊戯神通なり。

問うて曰く、地前似位の菩薩も五通の力を以て、浄仏国土成就衆生するや。

答えて曰く、少分これ有りといえども、真位の無方自在にこれを具足するがごとくにはあらず。

問うて曰く、地前似位の菩薩、一分これを具すとは、その行相、如何。

答えて曰く、先に言う所のごとく、天上の間において願を以て生を受けて三界を離

れざるが故に三界外において自在を得ず。あに一仏国より一仏国に至る徳を得んや。この菩薩、先仏の所説を聞き得て菩薩の行願を修すといえども、いまだ煩悩を断ぜざるが故に浄土に生ぜず、悪業を造らざるが故に悪趣に生ぜず。人間にはまた生等の八苦有るが故に菩薩の住処に能えず。ただ菩薩の意楽方便願力を以て、諸波羅密の行業を回し、天上の間に生じて浄仏国土の一分の行を具するなり。

問うて曰く、六欲天の中に都率を除いて外余の五天は、これ五欲に楽著するが故に入聖得果の器に非ず。また、色天はこれ禅味に著するが故に仏法の修行に能えず。もし爾らば諸波羅密の菩薩は、欲・色二天の中に生ずべからざるや。

答えて曰く、地前似位の菩薩はいまだ煩悩を断ぜずといえども、その行業尤も深厚なり。その智慧至って甚深なり。これに依って、十善の修因・戒行の業・修禅定の善根・波羅密の功徳、勝計すべからざるが故に欲天に居すといえども、深く五欲を厭うこと譬えば荊棘を厭うがごとし。色天に居すといえども、更に禅味を厭う。この故に寿尽の期に至って方便を回して後、天に生ずるなり。

問うて曰く、菩薩、方便智慧を以て欲天に処すといえども欲楽に著せず、色天に処すといえども禅味に著せずんば、もし爾らば後仏未出の間、仮りに暫く人間に処する菩薩も有るべきや。

答えて曰く、菩薩の意楽、不同なるが故に爾る菩薩も有るべし。

問うて曰く、もし爾らば人間の中には何れの処に生ずるや。

答えて曰く、菩薩家に生ずるなり。

問うて曰く、菩薩家とは何れの処ぞや。

答えて曰く、菩薩家とは刹利家・婆羅門家・居士家なり。

問うて曰く、何が故ぞこの三家を以て菩薩家と名づくるや。

答えて曰く、王家はこれ勢力有り、菩薩の身において難無し。婆羅門家はこれ智慧清貴なり、故に菩薩の身において難無し。居士家はこれ福徳力有って貧窮を免れるが故に菩薩の身において難無し。故にこの三家を以て菩薩家と名づく。

問うて曰く、菩薩、三宝無き時にもこの三家に生ずべきや。

答えて曰く、菩薩に意楽方便有るが故に、外には世人の威儀を示し、内には菩薩の行を証して、後仏の出世を待つが為の故に、三宝無き時といえども作願してこの三家の中に生じて菩薩の檀越と為る。

問うて曰く、これ等の菩薩も釈迦の出世に来生するや。

答えて曰く、『経』に云く、「あるいは他方仏国よりこの間に来生し、あるいは都率天上よりこの間に来生し、あるいは人道の中よりこの間に来生す」と。以上経文。　文の意

は、「惑従 他方仏国来生 此間」とは、これ真位の菩薩なり。いわゆる、一仏国より一仏国に至り仏国土を浄め衆生を成 就する菩薩なり。「惑従 都率天上 来生 此間」とは、迦葉 仏滅後の菩薩、都率天上に住し菩薩の行を修して釈迦の出世に来生するなり。あるいは天上より来下し仏の所説を聞いて得度す。彼の『阿含経』の時、八万の諸天、無生 忍を得る類のごとし。「惑従 人道中 来生 此間」とは、地前似位の菩薩は福智の諸功徳を以て、人間の菩薩家に生ずるなり。

問うて曰く、地上 真位の菩薩は分身散影して十方に布遍するの徳を備う。何ぞ必ずしも諸仏に値遇して浄 土の行を学せんや。

答えて曰く、菩薩所作の一切の事、皆、如来の加被に依らざること無し。下位の智慧は、すなわちこれ上 地の迷なるが故に、例せば彼の小 乗の智慧は、すなわちこれ大乗の顚倒無明なるがごとし。これに依って如恒河沙の文殊師利菩薩も弥勒菩薩の最末後身の挙足下足を知らず、いわんや果位の如来においてをや。然るに衆生 界の中、極めて化し難き者、無量 無辺なり。いわゆる、五逆・謗法・一闡提の人、これ等の重罪極悪の輩、痴闇の黒業に牽かれ、まさに阿鼻の火坑に入らんとす、尤も化に預かり難し。また楽著の諸天および無想長 寿天もまた化を蒙らず。菩薩、苦ろに以て大慈大悲の方便を回すといえども、衆生、輒く以て抜苦与楽の利生に預かり難し。この故に

強剛難化の群萌を化せんが為に、難化に値遇して必ず能くこれを化することは、如来にその加被を蒙ってこの利生を施すか。これに依って『論』に云く、「まさに知るべし、この菩薩、法王子地に住して諸願を満足し、常に諸仏を離れず、諸〳〵の善根を離れず、一仏国より一仏国に至る」と。已上　文の意、知るべし。

問うて曰く、「浄仏国土成就衆生」とは、これ一義とせんや、はた二義と云うべきや。

答えて曰く、この事知り難しといえども、且く傍正の義有らん。いわゆる、「浄仏国土」の辺に約して明さば、浄土はすなわちこれ依報なり。「成就衆生」の辺に約して明さば、往生はこれ正報なり。「浄仏国土」と言うといえども「成就衆生」を離れず、正報を離れて依報無きが故に。「成就衆生」と言うといえども「浄仏国土」を離れず、依報を離れて正報無きが故に。以て知んぬ、「浄仏国土」の日は依報を正とし、正報を傍とす。知る所以は、『経』の現文を見るに、「浄仏国土」を明す処には、皆、「従一仏国至一仏国」と云う。「浄仏国土成就衆生」を明す処にもまた「従一仏国至一仏国浄仏国土成就衆生」と云うが故なり。

問うて曰く、浄仏国土の菩薩遊戯神通とは何等ぞや。

答えて曰く、菩薩の遊戯神通とは、これ甚深の法門なり。十地、等覚の大菩薩も極

仏の境界に値遇してこの法を習い尽さんが為に、久しく因位に留まるなり。顕密の聖教、四依の論蔵、盛りにこの義を明す、尤もこれを学すべし。

沙門某甲、昔、先賢の学林に交わって、法風の余香を薫ず。彼此の明匠、各各の精談、白地にこれを聞く。その後、上人に対面の時、浄土の清泉に浴して穢躬の濁心を潤す。幸いに聖道、浄土の二師に伝えて、つらつら一切経論の諸文を案ずるに、一代所説の法門は皆ことごとく「遊戯神通」の四字に収まる。あるが説いて言く、菩薩、仏果を成ぜんが為に首楞厳定を証す、これを自行とす。この定を得已って、分身散影して十方に布遍し、遊戯神通して衆生を利益す、これを化他とす。自行、化他の功徳を成就し已竟って、等覚、一転して妙覚に入るの剋み、金剛座の上に登り、正覚を成ずるに垂とする時を名づけて灌頂大法王子と曰う。然るに灌頂に二有り。一には在家の灌頂、二には出家の灌頂なり。在家の灌頂は王法の秘蔵なり。出家の灌頂は仏法の奥蔵なり。口伝に非ずんば、これを知るべからず、云云。あるが説いて言く、転輪聖王の王子を号して灌頂大王子と曰う。五欲の園・娯楽の林において、遊戯自在にして恐るること無く、憚ること無し。無上覚王の仏子を号して灌頂大法王子と曰う。生死の園・煩悩の林において、遊戯神通自在なりと、云云。これに依って天親の『往生論』に云く、「また五種門有り、一には近門、二には大会衆門、三には

宅門、四には屋門、五には園林遊戯地門なり。前の四門に入るを自行門とし、第五門に出づるを化他門とす。乃至　これを入の第四門と名づく。出の第五門とは、大慈悲を以て一切苦悩の衆生を観察して応化身を示し、生死の園・煩悩の林、中に回入し遊戯神通をもって教化地に至る」已上『論』文。曇鸞の『註』に云く、「示応化身とは『法華経』の普門示現の類のごとし」と已上『註』文。　その義、知るべし。

問うて曰く、この文の初めに、念仏と言うは何等の義ぞやと問うて、答えるに不離仏の義なり、値遇の義なりと言って、この二義を以て念仏の義を答え畢んぬ。然るに今、かくのごとき等の問答は偏に、これ菩薩浄仏国土成就衆生の義なり。いまだ念仏の義を顕さざるは、如何。

答えて曰く、今、この造書の意趣、浄仏国土成就衆生の義を問答することは念仏三昧の至極甚深の義を顕さんが為なり。所以は何となれば、菩薩、仏に遇わずんば浄仏国土の行を知らず。菩薩、常に仏に値うが故に能く浄仏国土の行を知る。仏を離れざるが故に仏を忘れざるなり。仏に値遇するが故に常に仏を念ずるなり。この故に菩薩の浄仏国土の行を以て甚深の念仏三昧と名づけるなり。これに依って『論』に云く、「念無量仏土諸仏三昧常現在前」とは、無量仏土は十方諸仏の土に名づけ、念仏三昧は十方三世の諸仏を、常に心眼を以て見ること現在前のごとくなるに名づく。

問うて曰く、何をか念仏三昧とするや。

答えて曰く、念仏三昧に二種有り。一には声聞法の中には、一仏身において心眼をもって見たてまつれば十方に満つ。二には菩薩道には無量仏土の中において三世十方の諸仏を念ず。これを以ての故に「念無量仏土諸仏三昧常現在前」と言うなり。

問うて曰く、菩薩の三昧のごときは種種無量なり。何を以ての故にこの菩薩の「念仏三昧常現在前」を讃ずるや。

答えて曰く、この菩薩は仏を念ずるが故に仏道の中に入ることを得。これを以ての故に「念仏三昧常現在前」と云う。また次に念仏三昧は能く種種の煩悩および先世の罪を除く。余の諸〳〵の三昧は、能く婬を除くこと有って瞋を除くこと能わず、能く瞋を除くこと有って婬を除くこと能わず、能く痴を除くこと有って婬、恚を除くこと能わず、能く三毒を除くこと有って先世の罪を除くこと能わず。この念仏三昧は能く種種の煩悩、種種の罪を除く。また次に念仏三昧は大福徳有って、能く衆生を度す。この諸〳〵の菩薩、衆生を度せんと欲するに、諸余の三昧にはこの念仏三昧の福徳の能く速やかに諸罪を滅するがごとき者無し。説くがごとき、昔、五百の商客有り。海に入って宝を採るに、摩伽羅魚王の口を開き、海水、中に入り、船去ること駛疾なるに値う。船師、楼上の人に問う、汝、何等をか見る。答えて言く、三の日出で、白山羅

列し、水流奔趣して大坑に入るがごときを見る。船師の言く、これ摩伽羅魚王の口を開くなり。一はこれ実の日、両日はこれ魚眼なり。白山はこれ魚歯なり。水流奔趣は、これその口に入るなり、我曹、了ぬ。各各、諸〻の天神に求めて以て自ら救済せよと。この時、諸人、各各その事える所に求めるに、すべて所益無し。中に五戒の優婆塞有って衆人に語って言く、吾等まさにともに南無仏と称すべし、仏は無上たり、能く苦厄を救いたまうと。衆人、一心同声に南無仏と称す。この魚、先世はこれ仏の破戒の弟子にして、宿命智を得れば称仏の声を聞いて心自ら悔悟し、すなわち口を合す。船人、脱することを得たりと。念仏するを以ての故に能く重罪を除き諸〻の苦厄を済う、何にいわんや念仏三昧をや。また次に、仏は法王たり、菩薩は法将たり。尊ぶ所、重んずる所、ただ仏世尊なり。この故にまさに常に仏を念ずべし。また次に常に念仏すれば種種の功徳の利を得。譬えば大臣の特に恩寵を蒙って、常にその主を念ずるがごとく、菩薩もまたかくのごとし。種種の功徳、無量の智慧、皆、仏に従って得ることを知る。恩重きを知るが故に常に仏を念ず。汝、云何ぞ常に念仏して余の三昧を行ぜずと言わば、今、常念と言うはまた余の三昧を行ぜずと言うにはあらず。念仏三昧を行ずること多きが故に常念と言う『論』已上文。　念仏三昧その義深広なり。智者これを察せよ。

問うて曰く、菩薩、諸仏に値って以て仏土を浄むることを学するを念仏三昧と名づくることは、その義すでに顕れたり。ただし称名念仏甚深の義においては、その意いまだ顕れず、如何。

答えて曰く、今「浄仏国土」を問答することは、所詮、称名念仏の甚深の義を顕さんが為なり。然るに始め上代の先賢より当世の後学に至るまで、仏体を観ずる者を以て深とし、仏名を称うる者を以て浅とす。この義、同じく以て一致なり云云。ここに小僧某甲、且く聖道の学業を閣いて偏に浄土の要門に入り、深く本願の称名を信じて専ら決定の往生を期す。これに因って、修多羅蔵ならびに優婆提舎を披いて、口称名号の文証道理を勘うるに、法蔵菩薩の四十八願は、これ真位の中において浄仏国土成就衆生の行を修する時、発したまう所の本願なり。然るに彼の四十八の中の第十八願は称名念仏往生の願なり。たとい似位の発願といえども、願すでに成就せば誰かこれを信ぜざらん、いわんや真位の発願においてをや。尤もこれを信ずべし。何にいわんや、つらつらその願意を案ずれば、忝くも法蔵菩薩、始め真位の初心より等覚の後心に至るまで、颰陀劫を経、如恒河沙劫を送り、一仏国より一仏国に至り、妙覚究竟の諸仏に値遇し、浄仏国土成就衆生の行を習う時、彼の諸仏の前においてこの称名念仏往生の本願を説くこと度度なり。すでに諸仏の印可を被って造

り出だしたまう所の巧度の方便なり、深重の本願なり。もし爾らば称名の行、尤も甚深なり。誰かこれを浅とせんや。これはこれ大菩薩の秘術なり、これはこれ仏世尊の極智なり。信外の凡夫においては仰いで信を取るべき者か。

問うて曰く、真位の菩薩は浄仏国土の為に仏を離れず、仏に値遇す。これを念仏と名づくること、その義、然るべし。ただし地前似位の菩薩においては浄仏国土の行無し。もし爾らば不離仏に非ず、また値遇仏にも非ず。いわんやまた我等がごとき凡夫は、ただ仏名を称うるばかりなり。この土の能化釈迦如来はすでに入滅し、彼の土の教主阿弥陀仏はいまだ来迎したまわず。これすなわち離仏なり、また不値仏なり。何ぞ念仏と名づけんや。

答えて曰く、『論』に曰く、常に諸仏を離れざらんと欲すれば、菩薩、世世に生ずる所、常に諸仏に値いたてまつる。

問うて曰く、菩薩はまさに衆生を化すべし。何が故ぞ常に仏に値わんと欲するや。

答えて曰く、菩薩有っていまだ菩薩位に入らず、いまだ阿鞞跋致を得て、記莂を受けざるが故に。もし諸仏を遠離すればすなわち諸〳〵の善根を壊し、故に煩悩に没在して自ら度すること能わず。いずくんぞ、能く人を度せんや。人、船に乗し中流にして壊敗せば、他人を度せんと欲して反って自ら水に没するがごとし。また少湯を氷に投

ぜんに少処を消すといえども、反って更に氷と成るがごとく、菩薩、いまだ法位に入らざるに、もし諸仏を遠離し、少功徳を以て方便力無くして衆生を化せんと欲せば、少しく利益すといえども、反って更に堕落す。これを以ての故に、新発意の菩薩は諸仏を遠離すべからず。乃至　かくのごとき等の値仏には無量の利益あり、あに一心に見仏を求欲せざらんや。譬えば嬰児の母を離るべからざるがごとく、また道を行くに糧食を離れざるがごとく、大熱の時、涼風冷水を離れざるがごとく、大寒の時、火を離れんと欲せざるがごとく、深水を度るに船を離るべからざるがごとし。譬えば病人の良医を離れざるがごとく、菩薩も諸仏を離れざること上の事に過ぎたり。何を以ての故に。父母親属知識人天の王等は、皆、仏のごとく利益すること能わず。仏は諸菩薩を利益して、諸〻の苦処を離れ、世尊の地に住せしむ。この因縁を以ての故に、菩薩、常に仏を離れず。乃至　また次に菩薩、常に愛楽して仏を念ずるが故に身を捨て、身を受くるに恒に仏に値うことを得。譬えば衆生、習欲の心重きは婬鳥の身を受く、いわゆる、孔雀、鴛鴦等なり。瞋恚を習うこと偏に多きは毒虫の中に生ず、いわゆる、悪龍、羅刹、蜈蚣、毒蛇等のごとし。この菩薩、心に転輪聖王、人天の福楽を貴ばず、ただ諸仏を念ず、この故に心の所重に随って身形を受く。また次に菩薩、常に善く念仏三昧を修する因縁の故に所生、常に諸仏に値う。『般舟三昧』の中に説くがごと

き、菩薩、この三昧に入れば、すなわち阿弥陀仏国に生じ見たてまつる。すなわちその仏に問う、何の業因縁の故に彼の仏国に生ずることを得るや。仏、すなわち答えて言わく、善男子、常に念仏三昧を修し憶念して廃せざるを以ての故に、我が国に生ずることを得。

問うて曰く、何者かこれ念仏三昧、彼の国に生ずることを得るや。

答えて曰く、念仏とは、仏の三十二相八十随形好金色身の身より光明を出だして十方に遍満するを念ずべし。閻浮檀金を融するがごとく、その色明浄なり。乃至菩薩、この三昧智慧力を得るが故に、あるいは今身に意に随って諸仏を供養し、命終してまた諸仏に値遇す。これを以ての故に、菩薩、常に諸仏を離れずと説く。『論』文。已上

また天台の『十疑論』に云く、「『大智度論』に云く、譬えば二人、各〳〵親属の水に溺れる所と為る有り、一人は、情急にしてただちに水に入って救接す、方便力無きに為るが故に彼此ともに没す。一人は方便有り、往きて船筏に趣き、これに乗じて救接しことごとく皆、溺水の難を脱することを得るがごとし。新発意の菩薩もまたかくのごとし。いまだ忍力を得ざれば、衆生を救うこと能わず。これに為りて常にすべからく仏に近づき、無生忍を得已って、まさに衆生を救うことを得べし。船を得る者のごとし。また『論』に云く、譬えば嬰児母を離るることを得ず。もしまた母を離れば、

あるいは坑井に堕し、乳に渇して死するがごとし」と。已上　謹んで文の意を案ずるに、地前未証の菩薩および薄地底下の凡夫は尤も仏を離るべからず。所以は何んとなれば、如来を悲母に喩う、我等は赤子のごとし。もし仏母の加護を蒙らずんば、称名の赤子、何ぞ生死の火宅を離れ速やかに念仏往生を遂げんや。これに依って、善導和尚は称名の行者に就いて、種種の増上縁を明したまう。いわゆる、滅罪増上縁・護念増上縁・見仏増上縁・摂生増上縁・証生増上縁なり。また親縁等の三義を以て、摂取不捨の文を釈したまう。云云　また『法事讃』に云く、「弘誓多門にして四十八なれども、偏に念仏を標して最も親とす。人、能く仏を念ずれば、仏、還って念じたまう。専心に仏を想えば、仏、人を知りたまう」と。已上　然ればすなわち称名の行者に約せば、尤も不離仏の義有り、何ぞ念仏と名づけざらんや。

問うて曰く、ある人云く、称名はこれ浅なり、能く能く法門を学し、慧解を以て信入せば、たとい仏名を唱えずといえども、この信心に依って往生を得と。云云　この義、如何。

答えて曰く、この義、意得難し。所以は何んとなれば、称名念仏はこれ末代相応の要法、下根得度の易行なり。弥陀の本願に随い、善導の専修に順じ、一向称名の行を励むを日夜朝暮の勤と為して、三心欠くること無く、四修漏らすこと無きは、これ

すなわち決定往生の業因なり。然るに当世の義者の云く、学問に依って慧解を生じ、慧解に依って信心を生ずべし、この信心を具する者は称名せずといえども決定往生すと。云云　この條、尤も不審なり。末代の凡夫、たとい学すといえども、正智正解はなはだ以て有難し。ただ弥陀の本願を仰ぎ、偏に善導の勧化に任せて称名を行ずる人は、皆、これ自然の正智正解にして仏心に相応す。まず称名の行を修する上に、次に正しくその義の浅深を論ずべし。称名を捨てて後、ただ信心を取って証得往生と許し、しかもこの義を以て深義と言わば、その謬り幾くぞ。邪智を発し、高慢を致し、自損、損他するなり、魔説なり、仏敵なり。恐るべし、悲しむべし。

問うて曰く、ある人の云く、他力往生はこれ往生の正行なり。自力往生は全くその正行に非ず。この義、如何。

答えて曰く、当世の人人、盛んにこの義を談ず。その本文、何れの処ぞ。善導和尚は自力他力の名目を立てず。また曇鸞・道綽所立の自力他力の義には非ず。彼の『十住毘婆沙論』の意は、菩薩、阿鞞跋致を求めるに約して、自力他力を立つ。曇鸞・道綽はこの意に依れり。我が身、無行にして称名を唱えず、偏に信心を取ってこれを以て他力とすること、全くその本文無し。小智の輩、この邪義を立て自迷、迷他すること、尤も罪業の至りなり。早早に改悔の心を起し、急急に邪を翻して正に帰すべし。

問うて曰く、前の義のごときは、称名の行者において尤も不離仏・値遇仏の義有り。爾らばその義、委しくこれを聞かんと欲す、如何。

答えて曰く、念仏三昧は本願、本、見仏を以て所期と為すが故に、口に名号を称え、必ず仏を見たてまつらんと大誓願を起す。これすなわち不離仏・値遇仏の義なり。彼の真位の菩薩の浄仏国土の時の不離仏・値遇仏は、これはこれ菩薩深位の念仏なり。凡夫の行人は仏名を称念して、あるいは見仏を期し、あるいは護念を期し、あるいは来迎を期し、あるいは往生を期す。これに依って「人能念仏仏還念」の故に、すでに冥に護持を得ること有り。「即見真金功徳身」の故に、また現身に仏を見たてまつる。「一念乗華到仏会」の故に、また当来の勝利有り。加之、『阿弥陀経』の中のごときは六方諸仏の護念有り、これすなわち不離仏・値遇仏の義なり。これはこれ凡夫浅位の念仏なり。

問うて曰く、前の問答のごときは、六度を修行する菩薩、諸仏に値遇して仏国土を浄めるを念仏と名づく。もし爾らば、その六度の法、皆、念仏と名づくべきや。

答えて曰く、爾なり。仏教を念ずるが故、施波羅密を修し、仏教を念ずるが故に戒波羅密を修し、仏教を念ずるが故に忍辱波羅密を修し、仏教を念ずるが故に精進波羅密を修し、仏教を念ずるが故に禅定波羅密を修し、仏教を念ずるが故に般若波羅密を

修す。もしこの意に約せば、六波羅密は皆これ念仏なり。

問うて曰く、もし爾らば、この義、証拠有りや。

答えて曰く、『優婆提舎』に云く、「問うて曰く、仏、何の因縁を以ての故に『摩訶般若波羅密経』を説きたまうや。答えて曰く、菩薩有って念仏三昧を修す。仏、彼等にこの三昧において増益を得せしめんと欲するが為の故に『般若波羅密経』を説きたまう」と。已上

問うて曰く、受持読誦等の行もまた念仏と名づくべきや。

答えて曰く、爾なり。仏教を念ずるが故に受持読誦等の行を修す。これすなわち不離仏・値遇仏の義なり。およそ一切の功徳善根、仏を離れてはその法更に成就せず。それ持戒の人は、先仏所説の戒を信じてこれを持つが故に、仏の護念を蒙って、その戒成就すべきなり。また修禅の人は、先仏の教えに依って禅定を修す。仏の護念に預かって、その禅法成就すべきなり。また般若陀羅尼を学する人は、先仏の教えに依って法のごとく説のごとく、正智正解を以て法門を学するは、仏の護念に預かって無漏の聖智を開発するなり。これ等は、皆、これ不離仏・値遇仏の義なり。なかんずく口称念仏は、仏の名号を唱えて仏教に相応し、仏願に随順し、仏語に違せず。この故に見仏三昧、たちまちに以て成就し、弥陀の来迎に預かって往生の素懐を遂ぐ。こ

れはこれ不離仏・値遇仏の義なり。これ等の義、皆、これ四依の菩薩、仏の授記を蒙って弘めたまう所の義なり。仰いで信を取るべきのみ。もしこの旨を知らば、彼此の学者、諍論を致すべからず。各〳〵我が所行、皆、これ念仏なるが故なり。この旨を知らざる者は、念仏はこれ往生すべからずと言うは、はなはだ以て不審なり。

問うて曰く、善導宗の意は、万法の中において名号の一法を取って念仏と名づけて、その外の法を念仏と名づけず。何ぞ今、一切の法を以て、皆、念仏と名づくるや。

答えて曰く、今、念仏において総別二種の義有り。いわゆる総じてこれを言わば、万行、皆これ念仏なり。別してこれを言わば、口称名号を以て念仏とするなり。ただし、善導の意は総を捨てて別を取りたまえり。およそ聖教の習い、皆、広略開合の義有り。広の時は万法なり、略の時は一法なり。開の時は万法各別なり、合の時は一法二法なり。その一法二法とは、あるいは事に約し、あるいは理に約す。理に約する時は、万法すなわちこれ真如の一理なり。事に約する時は、万法すなわちこれ般若の一法なり。その般若とは、すなわちこれ仏智なり。その仏智とは、すなわちこれ事なり。上にいう所の総別の義のごとく、これを例して知るべし。

問うて曰く、『観経』に、三福とはこれ三世諸仏浄業の正因と云えり。爾らばその正因とは何んが意得んや。

答う、弟子某甲、年来の不審、この事に在り。経文にも委しく説きたまわず、人師も委しく釈さず、末学膚受、輒く解すること能わざるか。然りといえども修多羅の現文を拝見するに、すでに三福とは、これ三世諸仏の浄業の正因なりと云えり。釈尊金口の誠説、信ぜずんばあるべからず。これに依って四依の論蔵を披いて、三福の経文を験うるに、経論相順して、文義つぶさに有り。いわゆる六波羅密を分かって二とす。前の五を福と名づけ、第六を智と名づく。この福智の二厳、具足円満するを名づけて仏とす。また六波羅密をともに福と名づけ、ともに智と名づく。福すなわち智、智すなわち福なるが故なり。自らこの意を得て、『観経』を解する時、菩薩の六波羅密を以て三福の浄業と説きたまうなり。ここに知んぬ、真位の菩薩は一仏国より一仏国に至り、諸仏に値遇して、颰陀劫を経、如恒河沙劫を送って、浄仏国土成就衆生を習うは、すなわちこれ『観経』の三福を習うなり。これに依って菩薩因位の時も、皆、三福を以て浄土の正業とし、諸仏果位の時も、また三福を以て浄土の正因とす。然るに教主釈尊、別して西方極楽浄土門に依って、往生経を説きたまう時、総説有り、別説有り。総に約する時は三福を明して三世諸仏の浄業正因とし、別に約する時は称名を明して法蔵菩薩別意の弘願とす。この故に四依の菩薩、『論』を造って浄土品を釈する時、諸菩薩の荘厳仏土を明して云く、「かくのごとき等の仏土の荘厳

を名づけて浄仏土とす。阿弥陀等の諸経の中に説くがごとし」と。已上　まさに知るべし。総じて諸菩薩の浄仏土を明す時は、「如是仏土名為浄仏土」と言う。別して、一菩薩の浄仏土を明す時は、「阿弥陀等諸経中説」と言う。而るに今、三部の阿弥陀経の中には、釈尊別して法蔵菩薩の浄仏国土を説きたまう。その中においてまた通説有り、別説有り。通説とはこれ三福の浄業なり。別説とはこれ称名の念仏なり。

問うて曰く、『観経』の中には三福を明して三世諸仏の浄業の正因とし、般若等の経の中には六度を明して三世諸仏の成仏の行因とす。もし爾らば三福と六度とその修行各別なり、何ぞ同と云うや。

答えて曰く、般若等の経の意は、菩薩の修行を明すに六度を以て本とす。この六度修行の菩薩に就いてその二有り。一には六度を修して穢土において正覚を成ずる菩薩有り。二には六度を修して浄土において正覚を成ずる菩薩有り。穢土正覚の菩薩も浄土正覚の菩薩もともに六度を以て行の本とす。これに依って菩薩、浄土において正覚を成ずる時、六度の行業を以て浄土の正因とす。この六度の内において三福を摂す故に「三世諸仏の浄業の正因」と云う。般若等の経の意は、通じて浄穢二土の六波羅密を説いて成仏の行因とし、『観経』の意は、別して浄土の三福を説いて浄業の正因とす。然ればすなわち総と別と、その義異なりといえども、六度、三

福その法これ同じき者なり。

問うて曰く、菩薩浄仏国土とは、何んがこれを浄めるや。

答えて曰く、『優婆提舎』に云く、「仏、答えたまわく、菩薩、初発意より以来、自ら粗の身口意業を浄め、また他人に教えて粗の身口意業を浄めしむ」。

問うて曰く、もし菩薩、仏国土を浄めんには、この菩薩、無生法忍を得、神通波羅密に住して、然して後、能く仏土を浄むべし。今、何を以てか「初発意より以来、粗の身口意業を浄む」と言うや。

答えて曰く、三業清浄はただ仏土を浄むる為のみに非ず、一切の菩薩道は、皆、この三業を浄むるなり。初めに身口意業を浄むるは、後、仏土を浄めんが為なり。自身を浄め、また他人を浄めしむ。何を以ての故に。ただ一人のみに非ず、国土の中に生ずる者、皆、ともに因縁と作る。内法と外法と因縁と作る。もしは善、もしは不善、悪口の業、多きが故に地に荊棘を生じ、諂誑曲心なるが故に、地すなわち高下不平なり。慳貪多きが故にすなわち水旱不調にして、地に砂礫を生ず。上の諸悪を作らざるが故に、地すなわち平正にして多く珍宝を出だす。弥勒仏の出づる時の人は、皆、十善を行ずるが故に地に珍宝多きがごとし。

問うて曰く、もし布施等の諸善法も浄仏国土の果報を得ば、何を以てか、ただ浄三

業と説くや。

答えて曰く、善悪の諸法はこれ苦楽の因縁と知るといえども、一切の心、心数法の中のごときは、得道の時は智慧を大とし、摂心の中には定を大とし、作業の時には思を大とす。この思業を得已って、身口の業を起す。布施・禅定等も思を以て首とす。譬えば衣を縫うに針を以て導を為すがごとし。後世の果報を受くる時には、業力を大とす。この故に三業を説けば、すなわち一切の業法を摂す。意業の中にはことごとく一切の心、心数法を摂し、身口にはすなわち一切の色法を摂し入る、身行、三業の福徳具足すれば、すなわち国土清浄なり。内法浄きが故に外法もまた浄し。譬えば面浄きが故に鏡中の像もまた浄きがごとし。『毘摩羅詰経』の中に説くがごとく、「不殺生の故に、人、皆、長寿なり。かくのごとき等」と。已上　謹んで文の意を案ずるに、云く、菩薩の浄仏土はまず自他の三業を浄め畢って、次に浄仏国土の行願を成就し、自行化他の功徳を満足して、等覚一転して妙覚に入りて後、因位の本願に任せて十方の衆生を化したまう。それ法蔵菩薩、もしいまだ浄仏土の行願を満足せずんば、なお以て因位に留まるべし。然るにその行願、皆、ことごとく満足して、正覚を唱えて後すでに十劫を経と。まさに知るべし、不取正覚の誓い虚しからざることを。今はすなわち阿弥陀如来、浄仏国土の因位の本願を尋ねて、成等正覚果位の利

生を施したまう。この時に当って総じては、三福の正業を以て十方衆生をして三業を浄めしめ、別しては、六字の名号を以て一切有情をして三業を浄めしむ。これはこれ甚深なり。あえて疑謗すること勿れ。

問うて曰く、称名念仏はこれ三福の内とせんや、はた三福の外と云うべきや。

答えて曰く、三福の内に摂す。いわゆる、『観経』の中には、あるいは「受持三帰」と説けり。その中の帰依仏は、すなわちこれ念仏なり。あるいは「読誦方等経典」と説けり。口に名号を称するは、すなわちこれ読誦大乗方等経典なり。これに依って漢朝の人、阿弥陀仏と唱えるを四字経と名づく。云云 あるいは「修行六念」と説けり。六念の中の念仏は、これはこれ称名念仏なり。故に知んぬ、称名念仏は三福の内に摂すべし。その三福は、すなわちこれ三世諸仏の浄業正因なり。何ぞ浅行と言わんや。然ればすなわち十悪と破戒と五逆と謗法との人、一念十念の称名に依って極楽に往生することは、これはこれ三世諸仏の浄業正因の故なり。一切の諸仏、皆、以てかくのごとし。もし爾らば、これ等の罪人の念仏して往生するを何ぞこれを難しとせんや。まさに今、広く経論を勧うるに、一切衆生、念仏往生するに種種の故有り。一には菩薩の願故に。二には菩薩の巧方便の故に。三には菩薩の浄仏国土成就衆生の故に。四には仏智の故に。五には法不思議の故に。六には摩訶衍の法の故に。

七には譬喩の故なり。

一に菩薩願故とは、一切の菩薩において通別の二願有り。通願とは四弘誓願これなり。一切の菩薩、同じくこの願を発す。別願とは、いわゆる文殊師利のごときは菩提心を以て別願とし、普賢菩薩のごときは恒順衆生を以て別願とし、地蔵菩薩のごときは無仏世界度衆生を以て別願とし、釈迦如来のごときは五百の大願を以て別願とし、薬師如来のごときは、本、菩薩道を行ずる時、十二の上願を以て別願とし、多宝如来のごときは証明法華を以て別願とし、法蔵菩薩のごときは四十八願を以て別願とし、その中において称名往生を以て殊に別意の弘願とす。余の仏菩薩に異なり。云云

二に巧方便故とは、菩薩、自行化他の二種の功徳を成就すること、譬えば鳥の二羽のごとし。自行の辺を以て大智門とし、化他の辺を以て大悲門とす。大悲門に出でて化導に趣く時、衆生界無尽なるが故に法門もまた無尽なり。衆生をして度し易からしめんが為の故に、方便を巧み出だして衆生を利益したまう。これを菩薩巧方便の智と名づくるなり。これすなわち法蔵菩薩、別しては五劫の間これを思惟し、総じては如恒河沙劫の間、これを選択したまう巧方便の称名念仏なり。これに依って天親菩薩の『往生論』に云く、「生死の園・煩悩の林、中において遊戯神通出入自在にして、往生、意のごとくなるを菩薩の巧方便と名づく」と。已上取意。

三に浄仏国土成就衆生故とは、これはこれ法蔵菩薩、浄仏国土の昔、本、菩提心を発す時、巧み出だしたまう所の本願往生の念仏なり。もし浄仏国土成就衆生の時の本願に非ずんば、いささか一端の疑滞有るべし。すでにこれ無生忍を得るの後、遊戯自在神通の時、発したまう所の本願名号なるが故にあえて以て凡下の境界に非ざるをや。これに依って『十住毘婆沙論』に云く、「大菩薩の名を聞いて浄土に往生す」と。云云

四に仏智故とは、『無量寿経』に云わく、「仏智・不思議智・不可称智・大乗広智・無等無倫最上勝智を了せず」と。已上　然ればすなわち凡夫最劣の下智を以て、極聖最上勝智の成就したまう所の念仏往生を疑うべからざる者なり。

五に法不思議故とは、五不思議の中には仏法尤も不思議なり。これに依って善導和尚、世間待対の不思議を以て仏法の不思議を顕したまう。常途の人は、天において天と見せしめ、地において地と見せしめ、火において火と見せしめ、水において水と見せしむ。これはこれ不可思議なり。もし神通の人は、天において地と見せしめ、地において天と見せしめ、火において水と見せしめ、水において火と見せしむ。これはこれ不可思議なり。これに依って、弥陀の名号は世の常人の見に約せば、これ尤も浅なり。大菩薩の見に約せば、これ極めて深なり。これすなわち仏、不思議の法術を以

て、浅機の者の為には浅と見せしめて事を成し、深機の者の為には深と見せしめて事を成するか。例せば、彼の『浄名経』の中の一音異解のごとし。これ法の不思議なり。

六に摩訶衍法故とは、それ摩訶衍とは、これ至極大乗なり。小乗は法相を一途に定む、その法、小教なるが故なり。大乗は尤もこれ広博なるが故に、諸法の性相、一辺に定めず。彼の小乗の中には、声聞・縁覚は深く灰断の小執に沈み無為の円寂に帰すといえども、大乗の中においては、三乗の成仏を明す。彼の小乗の中には、仏も定んで生滅に帰して無余涅槃を証す。大乗の中においては、三世常住の仏を明す。彼の小乗の中には五逆、謗法等の重罪を滅することを明さず。大乗の中においては能く五逆、謗法等の重罪を滅することを明す。これに依って、『大乗論』に云く、「菩薩摩訶薩、般若波羅密を行ずる時、漏尽神通智証を得。かくのごとく、舎利弗、菩薩摩訶薩、般若波羅密を行ずる時、神通波羅密を具足す。神通波羅密を具足し已って阿耨多羅三藐三菩提を増益す。『論』に釈して曰く、大海の中に種種の宝珠有り、能く毒を殺す有り、能く鬼を遮する有り、能く病を破する有り、能く寒熱飢渇を除く有り、能く人の所願に随って皆、能く与うる者有り、かくのごとき等の無量無数の宝珠あるがごとく、大乗海の中にもまたかくのごとく種種の菩薩の宝有り、菩薩

の能く三悪道を破する有り、能く三善門を開く有り、能く五眼を生ずる有り、能く神通波羅密を修行する有り。この故に諸〳〵の菩薩、能く奇特希有の事を為す。いわゆる水想を取ること地想、水すなわち能く意に随って地を動ず。一身、能く多となり、多身能く一となる。虚空の中、常に微塵有って中に満つ。この人、離欲の福徳因縁の故に諸〳〵の微塵を集めて以て諸身と為して、皆、相似せしむ」と。已上　然ればすなわち大乗の意は、一に即して多なり、浅に即して深なり。小機の者の為にはこれ浅なり、大機の者の為にはこれ深なり。この故に曇鸞大師の云く、「十念を具足すれば、すなわち安楽浄土に往生することを得、すなわち大乗正定の聚に入る」と。云云

七に譬喩故とは、念仏三昧を以て如意宝珠に喩う。その宝珠は能く衆生の願に随って、万宝を雨らせり。この念仏は、法蔵菩薩、我が成仏の時の名号を以て造りたまう所の本願なり。その本願名号を称うるが故に、有智・無智、持戒・破戒、善人・悪人、男・女、貴・賤、皆、ことごとく往生を得。然ればすなわち南無阿弥陀仏とは、これ如意宝珠なり。一切衆生をして滅罪往生せしむ。あに珠の用力に非ずや。これに依って『往生論』に云く、「彼の摩尼如意珠のごとく相似相対の法なり」と。云云

そもそも、予、浄土門に入って、春秋年を送り、念仏の行を修して、寒暑日を重ぬること、すでに以て四十余回なり。然る間、時時、至極大乗の経論を披き、度度、

念仏往生の文義を窺うに、法蔵菩薩の行因いよいよ深く、弥陀善逝の悲願ますます広し。もしそれ我れ独りこの文を見、我れ独りこの義を知らば、必ず仏菩薩の意に違背し、定んで大法慳の愆に堕在せん。ここを以て随喜作善の為に、広度衆生の為に、念仏の奥義を後賢に留め贈る。文理、拠ろ有り、努力嘲ること勿れ。

時に嘉禎三年の歳、丁酉に次る、六月二十五日、安居念仏中、八旬の窮老、謹んでこれを記し畢んぬ。

徹選択本願念仏集　下終